2004年6月24日発行（毎月1回 24日発行）第2巻第6号通巻第8号

サファリ

大切なのは、遊びゴコロです！

Safari

6 2004 JUNE 680yen

良質スタイルが仕事も遊びも楽しくする

すごい「デスク」とデザイン文具。



今シーズンこそゼッタイ始めるロングボード

「サーフな男」のスタイルブック

インドネシア・バリ島に隠れ家（ハイダウェイ）を探す

もっとラクにお腹を引っ込めるアイデアあります！

35歳からの「超簡単」シェイプアップ

その流麗さを堪能する

クーペという贅沢

Safariとは？

サファリというとアフリカの探検隊を想像しそうですが、じつはこの言葉、1960～70年代のサーファーが好んで使ったものなのです。それは"Surfing Safari"。こちらは「未知なる波を探し求める旅」を意味しました。そこで本誌は、皆さんと「新しい世界を探しに出かけたい」と考え、Safariと名づけたのです。



プロダクトデザイナー・酒井俊彦が語る

デスクと空間の理想的な関係

書斎や仕事場などのワークスペース、それは自分の城とも言うべき場所。そこに必要とされる条件とは？
そして、ワークスペースに欠かせないデスクはいったいどう選ぶ？
さまざまな空間プロデュースを手がけるプロダクトデザイナーの酒井俊彦さんに、その極意を聞く。

写真＝相築正人(P41左上／右上／右中)　文＝張替裕子
photo : Masahito Aitsuki text : Yuko Harigae(Giraffe)

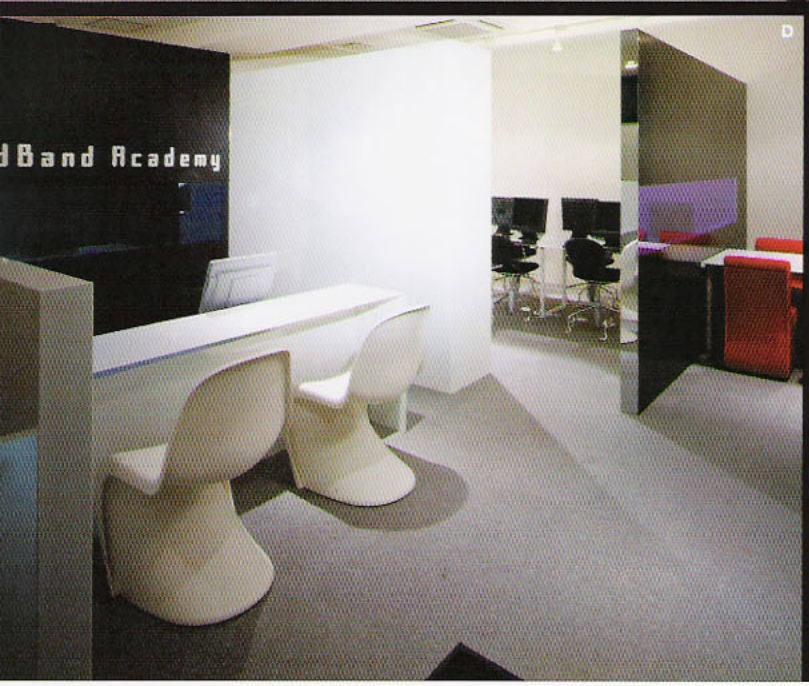


空間の可能性を広げる酒井俊彦のデザイン

A、B：音楽スタジオ《ロドリゲスルーム》、1998年。無機質なスタジオも、デザイン次第ではこれほどスタイリッシュになる。ミュージシャンが演奏するスペース（A）は、竹という素材や壁面の配色により、やわらかで親密な空間となっている。「オーナー所有のモダンファニチャーや、アナログスタジオ機器との調和からコンセプトが導き出された」と酒井さん。一方ミキシングブース（B）のコンセプトは「レトロなB級SF映画に出てくる宇宙船の内部」

C：マンションモデルルーム《3番町パレス》、2000年

D：コンピュータスクール《ブロードバンドアカデミー》、2002年。コンピュータが並ぶ空間を〝未来を感じさせる空間〟として表現することを主題にしたデザイン





快適な環境と楽な環境とは本質的に違うものです

「使う人間がほしいと思う快適さを備えていること。それがまず第一」

自分だけの城とも言えるワークスペース、そこに必要とされる条件は、とプロダクトデザイナーの酒井俊彦さんに訊ねたところ、まず返ってきたのがこの言葉。案外特別なことではないようにも思えたが、続けて彼はこう言った。

「ただし、それは仕事や作業をするために快適なコンディションであるということであって、楽であることとはまったく違います。楽な環境で仕事したいって言うのなら、極端な話、パジャマでゴロゴロできるような空間で仕事すればいいわけでしょ。でも、そんなダラけた空間は、ワークスペースとしてちっとも美しくない。大切なのは、いい緊張感を保っている快適さなんです」

たとえば、自分好みのデスクやブックシェルフを選ぶとする。でも、どんなにそれがステキでも、ダラけた気分でデスク回りや棚の本などを乱雑に散らかしていたら、ちっとも快適に作業することなんてできない。もちろんカッコいい空間になどなりはしない。快適でカッコいいワークスペースを手に入れるためには、使う人間にも努力が必要なのだ。「がんばらないと快適になんてなれないですよ」、と酒井さんは笑った。さすがはデザイナー、ちょっと耳が痛い言葉だ。

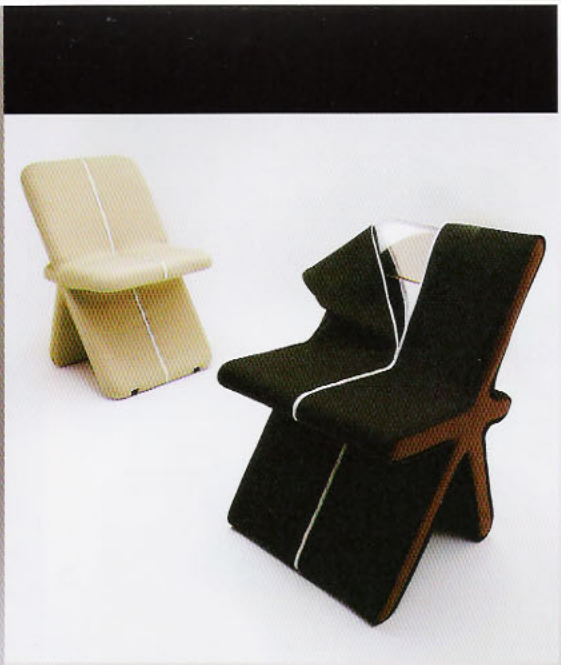
空間もプロダクツもまずはコンセプトありき

パソコンスクールやレコーディングスタジオなどの空間から、デスクやチェアなどのインテリア、はてはデジタル機器のプロトタイプまで、酒井さんの作品はどれもが個性豊かな表情を持ち、意外性に満ちている。彼は、どんなものでもそ



シンプルであることが何よりの個性

《FUN!シリーズ・シェルフ》、2001年。代官山「アッサンブラージュ」の、低コストでシンプルなオリジナル家具シリーズのひとつ





座る子どもとともに成長するチェア

《ATOM CHAIR》、1998年。子ども用のチェア。成長とともにアクリルの脚を減らせる。高さとカラフルさが減ることで椅子も大人っぽくなる



誰もが知ってる、あの椅子が変身

《Plia's suit》、2001年。何とパイプ椅子のためのカバー。「全世界で100万本以上が販売された椅子に新しい使用環境を提案したかった」

曲線だけのデザインが寛ぎを生む

《YOKO》、1993年。カフェのためにデザインした、幅の狭い小さなシングルソファ。同様のデザインでラブソファ《Fat YOKO》もある



PCもデザインの一部というPCデスク

PCデスク《M Desk》、1999年。iMacが発売されたとき、「それを置くべき場所が部屋の中にない」と感じてデザイン（共同デザイン：酒井真貴子）



置くものがカッコよくなるテーブル

《G FUNK》、1997年。P39のロドリゲススタジオ・ミキシングブースで使用。ミキサー卓2台を〝カッコよく〟置くためのテーブル

れが使われている光景をさまざまにイメージするところから、自分のデザインを始めると言う。

「もちろん、クライアントの希望はどういうものかとか、そのプロダクトの使用目的は何かということが最優先ですよ。それを僕なりに解釈したうえで、じゃあこの空間にこんな人が座っていたらどんな感じになるんだろうとか、このデスクをこういう場所に置いたらどんなふうに見えるのかとか、けっこう具体的に想像してみるんです。それは実際に使われるシチュエーションとは全然違うものでもいい。時間をかけ、いろんな状況を想像することで、〝これだ〟というコンセプトが見つかる。そのコンセプトがしっかりとできていなければ、空間や形の持つ〝意志〟みたいなものが、最後まで伝わっていかないと思うんです」

そう語る酒井さんの表情には、プロとしての厳しさがのぞく。だが、失礼ながらこの〝イマジネーション作戦〟、われわれ一般人のワークスペース作りにもじつに有効！　部屋でもデスクでも、それが使われている状況を、さまざまなバリエーションで想像してみればいい。そうすることで、いちばん自分にしっくりするインテリアやデスクが浮かび上がってくるに違いない。

お互いに引き寄せ合うようなデスクと空間の関係

そんな酒井さんの仕事場は、ガラスや白のアクリル板などを使った無彩色に近い空間。色がないことで、ゆったりとしたスペースがより広く感じられる。また、デザインという仕事は周囲に色があると邪魔に感じるのだとか。「とにかく邪魔になるものを排除して、空間を広く使いたかった」という彼のコンセプトが、そのまま形になったワークスペースだ。

デスクの天板もやはりガラス。もちろ





酒井 俊彦／Toshihiko Sakai

1964年、高知県生まれ。87年、東京造形大学卒業。89年、(株) コーゾーデザインスタジオ入社。91年、取材を兼ねて1年間渡豪。翌年の帰国後、(有) サカイ デザイン アソシエイツを設立する。インテリア、プロダクツ、マルチメディアなど多方面で活躍。ニューヨークやミラノなど海外のギャラリーにも作品を出品、高い評価を受けている。







テラスの食事がもっと楽しくなる

《FUMO outdoor》、2003年。ピッツェリアのテラスに置くためのテーブル。"FUMO (煙)" という店名にちなんで軽やかさをテーマに

確かにほしい、こんなデジカメ

デジタルカメラ《FinePix コンセプトモデル》、2002年。「所有する欲望」をテーマにデザインしたうちの一種。その美しさに商品化を望む声多し

んこのスペースのためにデザインされたもの。引き出しなどはいっさいない。

「デスクものびのび使える大きなものにしたかったので、天板はタタミ1畳分。大きくても圧迫感を感じないよう、透明なガラスにしたんです。引き出しを付けなかった理由？　単純にカッコ悪いから」

引き出しがあればデスク回りは片づく。だが、広く使うことをコンセプトとした空間に、足元を引き出しにふさがれたデスクはふさわしくないし、カッコ悪い。同様に酒井さんのこだわりを表しているのが、「数年前にがんばって買った」イームズのチェア。PCを使いながらのデスクワークにはやや不向きな面もあるものの、そのデザインと上質な座り心地に惚れ込み、ほかのチェアにする気はまったく起こらないと言う。

「デザイナーである以上、僕はつねにカッコいい空間にいたいし、そこに調和するようなカッコよくて上質なものに囲まれていたい。同じように、誰でもこういう空間にいたいという嗜好やコンセプトは必ずあるはず。それさえあれば、そこに調和するデスクやチェアは、自ずと決まってくるものだと思いますよ」

しっかりとした空間のコンセプトは、それにふさわしいデスクや家具を呼ぶもの。そしてその逆もまた真なり。これぞ、と惚れ込んだデスクが1点あるなら、それがパワーポイントとなり、空間全体のコンセプトを作り出すこともあるのだと酒井さんは話す。

使う者の思い入れを秘めたデスクと空間は、お互いを引き寄せる力を持つ。それが、デザイナー・酒井俊彦が考える、デスクと空間の理想的な関係と言えるだろう。まずは自分の嗜好とコンセプトをしっかりと認識すること。そこから自分だけの城造りは始まるのだ。